



No.29

mi.ra.i.e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2018年9月10日発行

編集・発行 出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033 東京都文京区本郷 4-37-18 いろは本郷ビル 2階

TEL 03-3816-2911 FAX 03-3816-2980 E-mail rouren@syuppan.net URL <http://www.syuppan.net/>

私がいま勧める1冊の本



『凜とした小国』（伊藤千尋・新日本出版社）

酒井 かをり（出版労連中央執行委員長）

「ここコスタリカには軍隊がありません」

TV から聞こえてきたその声に思わず振り向いてしまったのは10年以上前。以来、永世中立国スイスを抜いて、どの昆虫も大きい国としかイメージしていなかったコスタリカが私の中で一番になった。この本とは映画『コスタリカの奇跡』の市民上映会で出会った。

1949年に軍隊を手放してからコスタリカも戦争をしていない。日本と同様の平和憲法を持っている。大きな違いはその平和憲法をフル活用している点だ。憲法裁判所が存在し（ここが日本と異なる）、小学生でも国を相手に憲法違反と訴訟を起こし、活用している。コスタリカの特産物はエコ・ツーリズムと平和の輸出。国家予算の30%を占めていた軍事予算をゼロにして、国家の最大の資産である国民の教育費につぎ込んだ。国民ひとりひと

りが自分の行動に責任を持てるようになるためには自分の考えをきちんと持ち、他者の意見に耳を傾け、他者を尊重できるひとであることが大前提だ。そのためには教育がなによりも大切だと判断から「戦車をトラクターに」「兵舎を博物館に」変えた。現在の国立博物館は旧軍参謀本部の建物だ。

移民や難民を排除せず、総てのコスタリカ在住者が教育を受け、医療を受け国民と同じ権利で迎えられている。おもてなしどころではない懐の深さが、国籍や人種を超えて人々の中に平和の原点であるやさしさ、他者への思いやり、助け合う心を育み連鎖していく。

大統領選挙のたびに幼稚園児も参加しての模擬選挙が行われ、主権在民を実践して学ぶ。

すぐに見習いたいこと、再認識したいことが本書で紹介されている4つの国にはある。



『5時に帰るドイツ人、5時から頑張る日本人』

(熊谷 徹・SBクリエイティブ)

今城 啓子 (出版労連出版女性会議議長)

「コロナ」は、ドイツでは「フジヤマ」「ゲイシャ」などと並ぶ有名な日本語なのだそう。長時間労働や過労死・過労自殺が大きな社会問題となっている日本とは異なり、ドイツでは労働者の多くが午後6時に退社、年に一度は2~3週間の連続休暇を取ることが一般的だという。休養が心身に余裕をもたらすからか、自殺者の数は日本の半分以下だ。

本書では、1990年からドイツで働いている元NHK記者・熊谷徹さんが、自らの体験も交えつつ、日本人とドイツ人の働き方の違い、働く意識の違いを徹底分析する。個人・組織(企業)・国のレベルでさまざまな問題が提起されるが、ドイツが何よりも日本と違うのは、「労働者が余暇を得るのは当然の権利だ」という社会的合意がなされていることだろう。

その根底には、国による厳しい労働時間の監視がある。ドイツでは「労働時間は1日10時間を超えない」という上限規制が厳守されている。事業所監督局という役所が監視・制裁を行い、違反には最高15,000ユーロ(約180万円)の罰金が課される。この罰金は、なんと管理職個人に課されることもあるという。

また、「ワーキング・タイム・アカウント」(労働時間貯蓄口座)という、残業時間を貯めて有給休暇に振り替えるシステムが、約6割の労働者に普及している。「時間には時間を」という考え方は、適正な労働時間で暮らせる社会だからこそ成り立つものだろう。

残業、休日出勤なしでも日本を大きく上回る経済成長を実現しているドイツ社会。日本でも、働いた時間の長さだけを評価するような社会はそろそろ崩壊するのではないか。

地図から消される街

3.11後の「言ってはいけない真実」

青木美希



なぜ帰らないのか
何が起きているのか!

帰還率「4.3%」の街
知られざる母子避難者の自死
不正と中抜きだらけの「手抜き除染」
新聞協会賞3度受賞
震災直後から取材を続ける女性記者が見た現実とは

講談社現代新書

価格 920円+税

発行 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

03-5395-4415 (販売)

地図から消される街

3.11後の「言ってはいけない真実」

青木 美希 著

健康調査では、うつ病・不安障害をかかえる避難者は全国平均の倍以上。生活再建のあてのないまま、賠償・支援を打ち切れ、帰還せざるを得ない状況に置かれている避難者たち。「どうしてまだ避難しているの」という言葉を、いま、避難者たちは投げかけられる。結果として、不都合な事実を「なかったこと」として揉み消そうとする国家権力の思惑通りに、なっている。著者は不正と中抜きだらけの「手抜き除染」を暴く。11市町村の広大な現場をたった1年8か月で終わらせる。除染労働者は賃金も安全も保障されていない。

原発事故から7年経つ福島第一原発近隣地域で何が起きているのか。著者の綿密な調査で多岐にわたる「不都合な事実」が明らかにされている。その中には、原子力村の元トップクラスからの情報も。ぜひご一読を!



『紙つなげ！ 彼らが本の紙を造っている

再生・日本製紙石巻工場』（佐々涼子・早川書房）

大井 達夫（忍書房休日店主）

ご存知、地震と津波で甚大な被害を受けた日本製紙石巻工場を、わずか半年で操業を再開させるまでの、現場従業員たちの苦悩と努力の物語である。テレビプログラムにもなり、文庫化もしている本書は、すでにお読みになっている方も多いと思う。

いまさら何を、と言われるのを承知で本書を紹介するのには理由がある。今年5月、日本製紙は勇払、釧路、富士の各工場での紙の生産体制を大幅に縮小すると発表した。需要がなくなれば生産計画を見直す必要があるのは当然のことだ。しかし、復興のシンボル石巻については、縮小撤退はないのである。

1933年3月、昭和三陸大地震による大津波が、東北地方太平洋沿岸に甚大な被害をもたらした。36年疲弊した東北地方の経済復興のために国は東北興業株式会社を設立。また、

38年東北地方の豊富なブナ林に目をつけた王子製紙社長藤原銀次郎が東北振興パルプを設立。両社は協力して石巻に製紙工場を建設、40年に操業を開始する。つまり石巻工場はそもそも成り立ちからして、津波で被災した土地を支えるための復興のシンボルだったのだ。

こうした背景を知って本書をもう一度読み返すとき、石巻工場が背負う宿命のようなものを感じざるを得ない。その土地に宿る知的な霊や魔術的な力をゲニウス・ロキという。石巻工場のゲニウス・ロキは、津波と切り離して考えることはできない。そして、その工場生産される書籍用紙が、我が国の出版文化を支えているのである。傷ついてなお、日本の出版を支えようとする石巻工場が、私には不憫に思えてならない。未読の方は今すぐに。既読の方は再読がオススメです。



『フクシマ 2011-2017』（土田ヒロミ・みすず書房）

藏田 美鈴

写真集は美しい日本の里山の風景から始まる。雪景色、新緑、夏草、紅葉…と四季折々の風景が続く。しかし、だんだん異変が現れる。草木が刈り取られ、はぎ取られたむき出しの地面。防護服姿の人。山の中に設置された線量計。そして、フレコンバッグ。不気味なのはほとんどの写真に人の気配がないこと。

写真集『フクシマ』は、原発事故の直後から6年間にわたる、住民が消えた避難区域の風景の記録である。撮影者の土田ヒロミさんは被曝の危険を冒して避難区域に120回通い続け、5万カットに及ぶ撮影を行った。

定期的に同じ場所を同じアングルで繰り返し撮るといふ定点観測の手法を用いた写真が多くを占める。無人となってしまった民家を追跡した写真は、窓のカーテンの皺が1年後も全く同じ形のままであることが胸に刺さる。

フレコンバッグが並んだ校庭の半年後の写真では、フレコンバッグが跡形もなく消えている。どこへ行ったのだろうか？ ページを繰っていくと、夥しい数のフレコンバッグが積み上げられた広大な集積場の空撮写真が現れ愕然とする。定点観測があぶり出すのは、事故によって激変した風景や代謝を止めた風景。

かと思うと、息をのむほど美しく咲き誇る山藤の花の写真が混じる。両者はまるで別世界のようだが、これらの風景は隣り合わせなのだ。『フクシマ』では事故前と変わらない美しい自然と、事故のせいで変わり果てた、この世の終わりのような風景が交錯する。

原発事故はまだ全然終息していない。けれども私たちは福島について多くを知らない。この6年間で何が起って何が失われたのか、『フクシマ』を見て思いを馳せてください。



「原発、長州、インパール」

“NO NUKES voice 16号” 鹿砦社

たけしま さよ (出版ネッツ、マンガ職人)

こういう本が出ているとは知らず、まったく迂闊だった。神戸の Book 1st に何と平積みされていた雑誌の名は“NO NUKES voice”。出版元はあの鹿砦社だ。季刊ですすでに16号を数えていた。俺に失うものはねえ、という気概が立ち昇ってくるようだ。

巻頭から広瀬隆氏が吠えておられる。「明治150年」は長州閥のウソで塗り固めたクーデターの自画自賛。吉田松陰を濫觴とする侵略思想集団の、資産の強奪と文化の破壊行為の正当化。維新の志士とはただの泥棒、暴力団だと。おっしゃる通り。所詮歴史は勝者のもの。記紀のような偽書をありがたがって押しいただいている国ですもの。

今回のもうひとつの特集テーマは東京五輪。本間龍氏の「21世紀の〈インパール作戦〉」というご意見にはいたく共感した。スポンサ

ーであるアメリカの利益のため、「アンダー・コントロール」の大嘘で開催を勝ち取り、政府、JOC、電通などが暴走。杜撰な資金計画を立て、真夏の酷暑の中、タダ働きのボランティア11万人を動員して、無謀な作戦を強行しようとしている。批判すべきマスコミは翼賛化しており、原発事故隠しと金儲けのためのイベントを止めようとする者はいない。

雑誌の記事紹介に終始してしまったので、少し自分の宣伝も。兵庫県篠山市は原子力災害に関して、全国的にもユニークなハンドブックを配布しています。合言葉は「とっとと逃げよう」。私が解説マンガを描いています。ネットで公開中。是非お取り寄せを。



『戦慄の記録 インパール』

(NHK スペシャル取材班・岩波書店)

大島 直樹 (二玄社労働組合)

太平洋戦争の中で最も悲惨な戦いといわれた「インパール作戦」。昨年の夏に放映されたテレビ番組を取材班が書き下ろし書籍化したものである。番組は、いまも兵器の残骸が散らばるジャングル、兵士たちの死体が折り重なり「白骨街道」と呼ばれた舗装されぬぬかるんだ山道、生死の境をさまよひ辛うじて生還した元兵士たちの「地獄」と呼べる惨状、対して軍の杜撰な計画、理不尽な命令や上層部の無責任な実態などを幅広く取材し、冷静な語り口ですすめて好評をえた。番組放送後には、ツイッターに「あなたの周りのインパール」というタグで自分が直面した理不尽な体験をつぶやく人々が急増した、という。

「インパール作戦」に、「あの頃」のあらゆる不条理が映る。曖昧な意思決定で、強烈な意志の個人に物言えぬ空気が支配される組

織、一度決定されたことはたとえ失敗と分かっていても簡単に変更できない体制。責任をとらず逃げていく指導者。それでも疲弊し戦闘以前の病いや飢えに責められながら黙々と命令に従い、死んでいった兵士たち。毎朝、軍司令官が必勝祈願の祝詞をとこなえる異様な状況のもと、ある兵士は「あと(味方の兵士を)5000人殺せば、この陣地は獲れる」という軍参謀の言葉に「悔しいけれど、兵隊に対する(上層部の)考えはそんなもんです」と、命長らえていま当時を思い慟哭する。

いま「組織」での「隠ぺい」「黙認」「無責任」が蔓延し、その中で傷つき倒れてゆく「兵士たち」が多く報じられている。この国は「あの頃」から何ひとつ変わってはいないのか。「わたし」の周りは「インパール」なのか。この道は「白骨街道」につながってはいないのか。



『棋士とAI—アルファ碁から始まった未来』

(王 銘琬・岩波新書)

柏木 豊 (出版労連中南部地協議長)

本書はプロ棋士であり、囲碁対局ソフトの開発にも携わっている人気棋士の王銘琬九段が「碁を打たない方のための本としてどなたにも楽しく読めるように」と執筆したものです。

1997年にチェスのコンピューター対局ソフト「ディープブルー」が当時の世界チャンピオンのカスパロフを破り、世界を驚かせました。そして、人間にとって最後の砦であった囲碁も、ディープラーニングという技術で新しい次元に到達したAI「アルファ碁」が、2016年3月にトップ棋士の韓国のイ・セドルを4勝1敗で破り、翌年5月にはアルファ碁「マスター」が弱冠19歳の世界最強の棋士・柯潔に3勝無敗と圧勝しました。

さらに、同年10月には、その「マスター」に対して「教師なし学習バージョン」の「アルファ碁ゼロ」が100戦して89勝の成績を

収めたと発表されました。つまり、「アルファ碁ゼロ」は人間が数千年かけて築いてきた「囲碁の定石」を学習せずに、1年足らずの短期間で、世界最強棋士を破ったアルファ碁「マスター」を超えたのです。

囲碁ソフトは2006年に「モンテカルロ法」(ランダムなシミュレーションにより近似的な答えを得る方法)の採用によってブレークスルーを果たし、さらに、「ディープラーニング」(ニューラルネットワークという人間の神経回路をモデルにしたプログラムをたくさん重ねたシステム)の採用によって“囲碁の神”といわれるまでに進化したのです。

「アルファ碁」の勝利によって、世界のAI研究は「ディープラーニング」にしばられ、今、AIの大波が人間社会に押し寄せています。本書はその歴史的証言の書でもあります。



『スタジアムの宙にしあわせの歌が響く街

—スポーツでこの国を変えるために』(天野春果・小学館)

井上 翼 (小学館労働組合)

開催を2年後に控えた東京五輪。膨らみに膨らんだ予算、ボランティアスタッフへの過酷な要求、猛暑……。 「無事に開催できるのか? そもそも、誰のための五輪なのか?」そう考えていたときに、出会ったのが本書だ。

著者の天野春果氏はJリーグ・川崎フロンターレの名物プロモーション部長。選手が登場する算数ドリルをつくって市内の学校に配ったり、南極や宇宙ステーションとスタジアムを中継で結んだり、取り組みはとてユニークで、実現への道筋は非常にドラマチック。アイデアと行動力でこれだけ面白いことができる、ということに非常に勇気づけられる。

しかし、一番印象に残っているのは、第一章のタイトルにもなっている「勝利は目的ではなく、手段である」ということ。フロンターレにとっての目的は、試合に勝つことでは

なく、サポーター、市民に愛され、その生活を未来永劫豊かにすることだ。だから、試合に勝つこともイベントも、すべてはチームがもっと愛されるための手段にすぎないのだという。

さてここで、五輪の話に戻ろう。五輪の目的はなんだ? 参加する人も応援する人も、五輪を通してすべての人が幸せになることだと私は思う。しかし、今のままでは東京五輪が人々に愛され、幸せをもたらしてくれるとは残念ながら思えない。非現実的な試算にもとづいた誘致活動に始まり、競技場建設にまつわる過労死、複雑に絡みあう利権。今一度、目的は何なのか、誰のためのものなのか、私たちを含めこの国全体で考えなければならないと思う。

余談だが、著者の天野氏は現在、五輪の組織委員会に出向中だ。果たしてどんな突拍子もないことを仕掛けてくれるのか、楽しみだ。



『あなたが気づかないだけで神様もゲイも いつもあなたのそばにいる』（平良愛香・学研プラス）

伍井 さゆり（医学書院労働組合）

本邦で初めて、男性同性愛者であることをカミングアウトしたうえで牧師となった著者による自伝。同性愛者であることを自覚した思春期、自らのセクシュアリティがキリスト教の教えに反しているのではと懊悩する青年期、そして「カミングアウトしたゲイの牧師」として活躍する半生が活写されている。著者のカミングアウトに際して、「愛香がこれからすばらしい女性と出会えるように祈ろうと思う」と拒絶的な態度をとっていた牧師である父親（沖縄基地解放運動のリーダーでもある人物）が、年を経るにつれ「自分にとっての十字架（＝とても重いものだが、使命であり喜びでもあるもの）は沖縄だが、同性愛者だということが、愛香にとっての十字架なんだな」と理解を示すようになるくだりが、とりわけ印象深い。「差別者にも被差別者にもならないために

知っておきたい」人権やセクシュアル・マイノリティの基礎知識をまとめた「性と差別にまつわる特別講義」も収載されている。労働組合でセクシャル・マイノリティに考慮した労働条件を要求・獲得したいと考えている方々や労務関係者にはもちろんのこと、現代の人権問題を広く学びたい方にもお勧めの一冊である。

「神がこのようにあなたを作り、そのままのあなたを愛している」との普遍的かつ根幹となる教えがある一方で、2000年の間に権威による支配・統治のために聖書を歪曲し差別的なヒエラルキーをも作り上げてしまった歴史をもつキリスト教。その伝統的な差別構造を、聖書の記述に立ち返り読み直し、乗り越えていく著者の態度は真摯かつ痛快でさえある。このような聖職者が日本にいることが誇らしく、希望だ。



『ソクラテスの弁明 クリトン』

（プラトン・久保 勉訳・岩波文庫）

匿名希望（日本文化科学社労働組合）

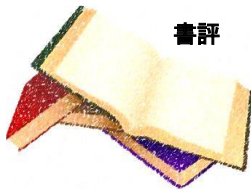
本書は、ギリシャの哲学者ソクラテスが紀元前399年に「神々を信ぜず、かつ青年を腐敗させる者という罪名」で訴えられ、公開裁判で語った弁明を弟子のプラトンが著し、残したものである。イエス・キリストが生まれるより前のアテネで政治や法律も文化も風俗も違う時代の考えが、文字活字として残り、日本でも1927年に翻訳出版され、現代の私たちにも伝わる。なんと「第106刷」である。非常に難解だが、今でも新鮮で通用すると思う。

「人間たちよ汝らの賢者は例えばソクラテスの如く自分の智慧は、実際何の価値もないものと悟った者である」といった「無知の知」を伝えた。より知りたい、確かめたいということが大事なのだろう。票決により死罪となるも「私を有罪とした諸君よ、さらにはるか

に重き罰が諸君の上に来るだろう。今よりもさらに多くの問責者が諸君の前に出現するだろう。峻烈で深くこれに悩まされるだろう」と予言し、結果には潔く従っている。

後半の「クリトン」では、死罪を逃れる手助けに来たクリトンに、国法などを決めてきたのはおおもとであり、家族や友人の望みがあるろうと守らなければならぬ。命令を履行するかもしくは、非を悟らせるしかない、「悪法も法なり」と納得させている。

異国で、とこしえに古い考え方が、連綿と読み継がれて残されていることは、何か心に留め置かれていくだろう。何歳で読むかによって、おそらく違う解釈になるかもしれないが、何回も読まねば本当のことは、よくわからないかもしれない、手ごわい内容ではある。



書評

『しあわせになるための「福島差別」論』

池田香代子、清水修二、開沼 博、他 著

2018年1月 2300円+税 かもがわ出版

本書は「被曝による健康被害はない。あるのは避難の被害」として、年間1mSv/y基準の緩和や県民健康調査の縮小を主張する内容、御用学者とはみられていない学者・文化人(確信犯ぞろいという声もあるが)が著者であること、版元があのかもがわ出版であることなどから発売当初から賛否が渦巻いた。

本書全体のトーンは、7年たって明らかになったことは、福島では深刻な放射能被害はなかったというものである。あったのは避難の被害だったのだと強調する。この主張は、避難は無意味だったとして、原発事故によって避難を余儀なくされた人々をおとしめ、原発推進を後押しすることを意味している。そしてこのような主張にとって都合の悪い甲状腺がんの多発については、被曝のためではな

く、過剰診断のせいであり、そもそも甲状腺がんはたいした病気ではないと補強する。

燃料デブリや汚染水の処理に見通しが立たないと決めつけるのは、まるで事故の収束を望んでいないかのようだなどと悪罵し、さらに「廃炉に30~40年かからない可能性もある」(開沼)という願望にすぎないものの表明は、「科学的な議論の土俵を共有する」という本書の表看板の虚偽性を浮き上がらせる。

本書には今の福島の現実が、国策によって反対運動を踏みにじって原発が作られ、その原発が地震・津波によって過酷事故を引き起こした結果であることへの怒りが無い。それと裏腹に、著者たちは批判に怒りをぶちまけていることを付記しておく。

(伊豆野 潔)



東日本大震災から思うこと

松枝 智之 (福島県郡山市)

私は、双葉町役場住民課住民係環境担当として、廃棄物、墓地、公害対策等を担っていた。消防交通の副担当として、さらには災害対策本部員、原子力災害のオフサイトセンター参集要員として、住民安全班のスピーディを担当しており、不法投棄等のパトロールを実施していた。

そして、東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故により、双葉町が町機能を埼玉県に県外避難したが、相馬市の遺体捜索・安置、災害廃棄物対策本部、動物救援本部等や川俣町と猪苗代町の避難所運営に従事しながら、想定のなかった事故由来性放射性廃棄物や、中間貯蔵施設の整備等の検討のため、環境省や福島県との交渉に携わってきた。震災前からすべての部局と連携を密にしていたために、緊急時に迅速に対応できたところである。

埼玉県に避難して直面した課題は、計画の理念が根本的に違うところだった。福島県の原子力防災計画では「壊れない」ことを前提としており、埼玉県のあらゆる防災に関する計画は「首都直下地震は必ず起こる」という理念のもとに、策定されていたのだ。福島県を飛び出した双葉町および双葉町社会福祉協議会は、福島県の行政のネットワークから離脱し、埼玉県の指揮・監督に従うこととなり、福島県での経験はほとんど役に立たなかった。先進的な埼玉県の計画を斬新に感じ、参考になったのは事実であり、福島県に帰還してからもたいへん役立ったと思っている。

昨今、大阪北部地震や、西日本豪雨などの災害が多発している。これからの災害に対しては、市町村の行政圏域を見直し、広域中枢連携はもとより、ゆるやかな連携を図り、最適な立地に拠点を集積させることで、得意な分野をそれぞれの市町村が担う方式の行政へと制度を変えることにより、効果が期待されるのではないかと思っている。地方自治体も、人件費抑制や働き方改革の名の元に、人員削減が進んでいる。一市町村がすべての事務を行うのではなく、複数の市町村が連携することが重要である。

最後に「帰還＝復興」ではないと言いたい。

📖 編集後記 📖

「本が読まれなくなった」とお嘆きの方々もおられるでしょう。書籍や雑誌の売上げが年々減少していることは事実です。しかし、読書人口が減っているわけではないようで、いろいろな形で文字は読まれているのです。私たちは言論・出版・表現の自由を大切にすると同時に、本の力を信じています。人生を変えるような本との出会いもあるはず。今号は「私がいま勧める1冊の本」と題し、出版産業に携わる10名の方々に、これはという図書を紹介してもらいました。憲法・政治関連では『凍とした小国』『戦慄の記録 インパール』『ソクラテスの弁明…』『スタジアムの宙に…』、震災や原発関連では『紙つなげ!…』『フクシマ2011-2017』『原発・長州・インパール』、人権関係では『5時に帰るドイツ人…』『あなたが気づかないだけで…』、そして『棋士とAI』。仕事で忙しい毎日ですが、秋の夜長、本を手に見ませんか？ あなたにとっての1冊が見つかるかもしれません。(T)